

しば た じょう
柴 田 城

みね はた
峯畑遺跡第7次調査

筑紫野市文化財調査報告書第71集

2002

筑紫野市教育委員会

例 言

1. 柴田城は工事着手前の立会の記録であり、峯畑遺跡は確認調査の記録である。
2. 本書掲載の遺構実測図の方位は、国土座標の入っているもの以外は磁北である。
3. 柴田城の測量調査は、社会教育課文化財担当主査長野卓司・同主事奥村俊久・同技師池松幸路・同技師渡邊和子が行い、峯畑遺跡の確認調査は渡邊が実施した。
4. 本書の執筆・編集は渡邊が実施した。

目 次

	頁		頁
柴田城		峯畑遺跡第7次調査	
I. 調査に至る経過	4	I. 調査に至る経過	9
II. 位置と環境	4	II. 位置と環境	9
III. 調査の概要	5	III. 調査の概要	9
		IV. 出土遺物	13
挿図 (Fig) 目次		写真図版 (PL)	
Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S 1/25,000)	1	PL. 1 現況写真	6
Fig. 2 柴田城位置図 (S 1/2,500)	2	PL. 2 現況写真	7
Fig. 3 筑紫野市周辺の中世山城分布図 (S 1/100,000)	3	PL. 3 出土状況	11
Fig. 4 縄張り図	5	PL. 4 現況写真	11
Fig. 5 現況測量図 (S 1/300) 折り込み		PL. 5 出土遺物	13
Fig. 6 峯畑遺跡位置図 (S 1/2,500)	8		
Fig. 7 調査対象地および試掘位置図 (S 1/200)	10		
Fig. 8 出土状況実測図 (S 1/20)	11		
Fig. 9 市内出土の類例実測図および遺物実測図 (S 1/10・1/20・1/6)	12		
Fig. 10 出土土器実測図 (S 1/3)	13		

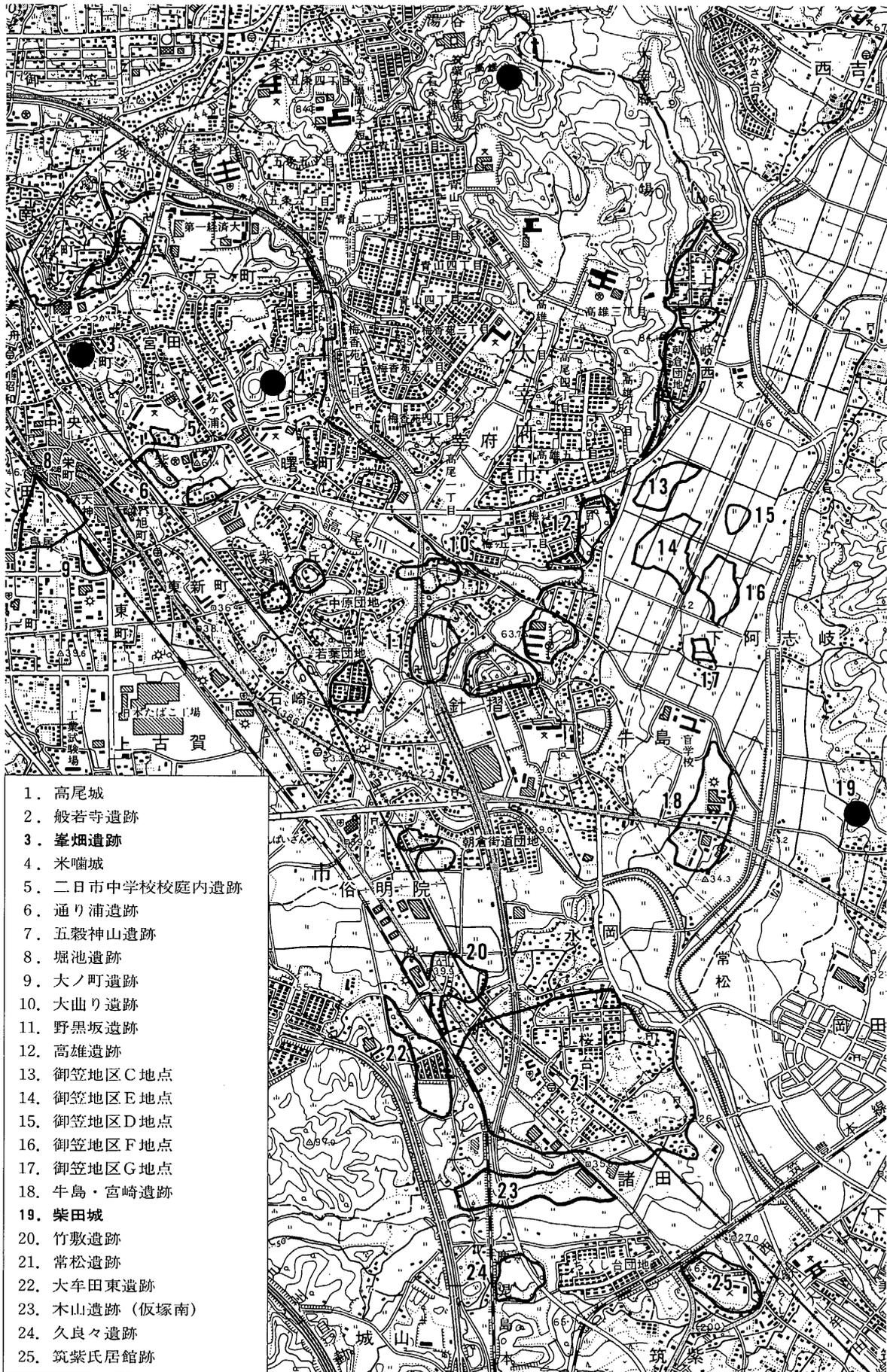


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (S 1/25,000)

しば た じょう
柴 田 城



Fig. 2 柴田城位置図 (S1/2,500)

筑紫野市周辺の中世山城分布図

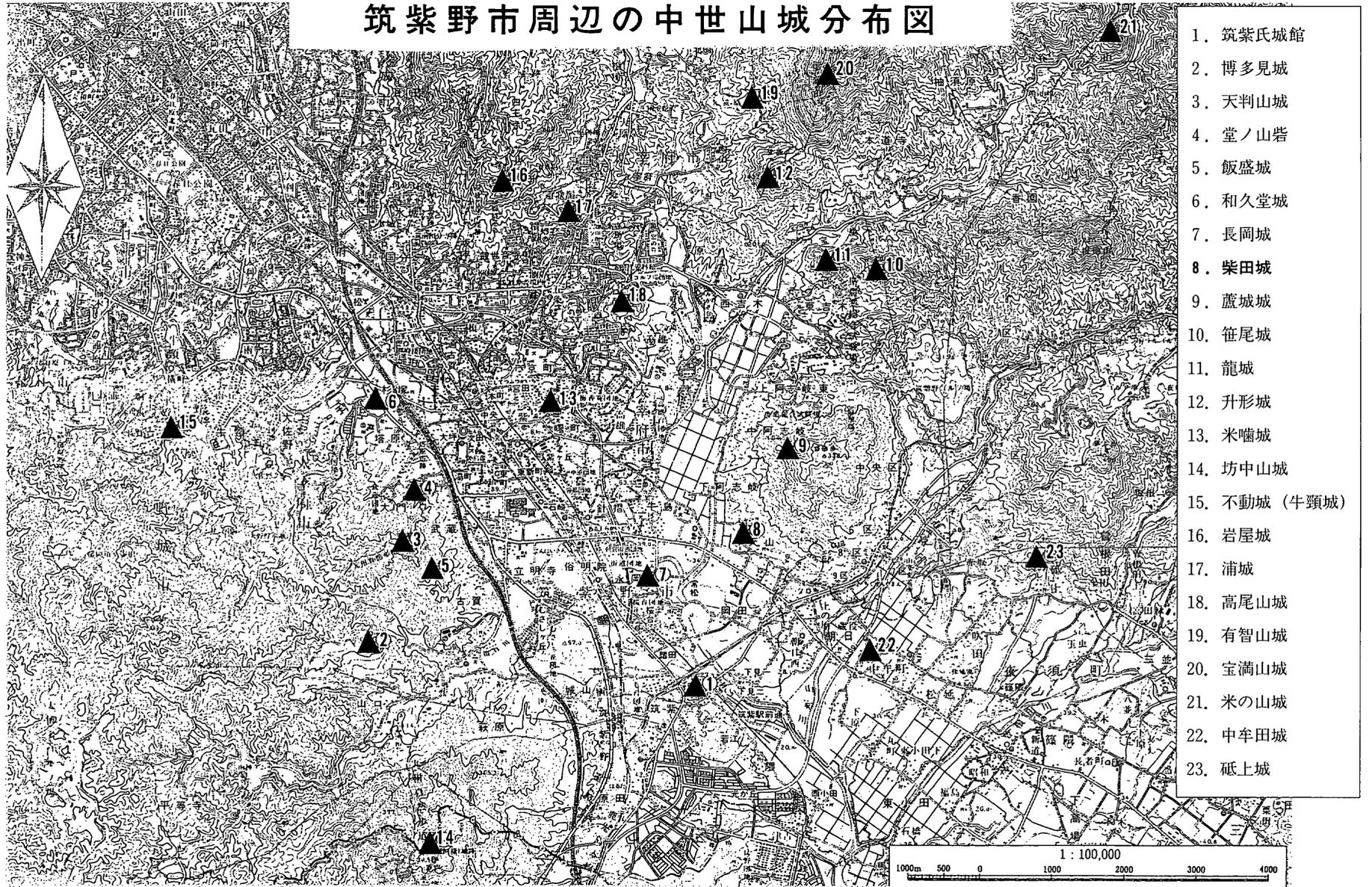


Fig. 3 筑紫野市周辺の中世山城分布図 (S1/100,000)

(筑紫野市史上巻より転載一部改変)

I. 調査に至る経過

平成9年1月14日付けで筑紫野市大字天山337番1の一部の田を資材置き場や貸し農園とするために市教育委員会に対し、当該地の埋蔵文化財の所在について照会がなされた。この照会に基づき同年2月6日に確認調査を行った。確認調査は、開発予定地のすぐ南側に柴田城が所在し、ここにも柴田城関連の遺跡が存在する可能性も考えられたため計画面積の1,745㎡にバックホーを用いて5本の試掘トレンチを設定。遺構面観察を行った結果、予定地の一部に文化財が確認されたため開発業者に対し確認調査の報告、および文化財保護上必要な協議を行った。当初計画の進入路の位置を変更することにより遺跡自体の保全が計られることで協議を完了し、直ちに文化財保護法第57条の2第1項の届出がなされた。

平成11年4月23日に前回と同じ開発業者より土地を有効利用するため、残りの天山337番1の斜面部の掘削に伴う文化財の所在について照会があがった。今回の掘削は柴田城の本体にかかるため、地権者と文化財保護上必要な協議を再行った。しかし掘削以外に土地の有効活用は望めなく、保存を前提にした協議はできなかった。協議後、文化財保護法第57条の2第1項の届け出があった。この結果福岡県教育委員会より工事立会を実施する旨の通知があり、これを地権者に伝達した。改めて地権者と調査についての協議を行い、地形測量に主眼をおいた調査を実施することで合意した。

II. 位置と環境

柴田城は筑紫野市大字天山377番1に所在する。

筑紫野市東部にある標高338.9mの宮地岳の南麓、天山集落の北側にあつて、筑後川の支流である宝満川の東側にあたる独立丘陵上に位置し標高51mを測る。

江戸時代には御笠郡から夜須郡に抜ける博多街道が通り、西には宝満川沿いに宰府道があつて交通の要衝であつた所である。

太宰府へ抜ける二日市地峡の南側関門にあたる立地を生かし、ここに築城されたと思われる。

この柴田城については、「筑前国続風土記」に「筑紫氏の端城にして、村山近江、其子彈正在城せり。是筑紫広門の旗下也。」とあり、また天正六年（1578年）秋の柴田川の合戦の状況などが記載されている。二百五十年後の天保14年（1843年）に秋月藩御絵図方、大倉種周によって描かれた「筑豊地方古城址図六冊」のなかの「古戦古城之図」に柴田城の縄張り図が掲載されている。この絵図によると本丸にあたる主郭を中心に南側に小さな曲輪^{くるわ}を段状に構築し、周辺には带状に腰曲輪^{こしくらわ}と横堀を巡らしていることが窺える。

近年、元久留米工業大学客員教授・木原武雄氏（佐賀大学・教育研究学内特別経費による報告書）や中西義昌編の歴史資料として戦国期城郭調査の報告書が作成されている。

これらの報告によれば、大倉種周が描いた往時の縄張り図は非常に正確に書かれた絵図であることが判断される。

現在の城跡は樹木が生い茂り、鬱蒼とした森を彷彿させる。城の中心部は墓地や畑として利用されているが、絵図に描かれた土塁や空堀が非常によく残り、絵図そのものの状況を読み取ることができる。

III. 調査の概要

作成した測量図 (Fig. 5) と木原武雄氏の作成された縄張り図 (Fig. 4) を比較すると A~F 区が武者隠れの腰曲輪にあたるものと思われる。

A 区は、標高 37m 前後を測る細長い平坦地を形成しているが、本丸側から水路側に向かって僅かに傾斜を見せている。そして、ほぼ 10m 程の空間を形成しながら B 区へと向かう。この空間地は、B 区から A 区へのスロープとして作られている。ただ縄張り図にあるような土塁は現況図では表現できていない。

B 区では標高 39m 前後の位置が、ほぼ全域小規模の平坦面を形成する。この平坦面は A 区より僅かに高い位置に作られる。また A 区のような傾斜は存在しない。

B 区から C 区へは幅 1 m 前後の僅かな高低差の切れ間を設けている。C 区にも B 区よりは狭い平坦面をつくるが、これも B 区同様にほぼ全域が平坦となっている。この平坦面の標高は 39.5m を測り、B 区より僅かに高く位置する。

C 区から D~E 区間は空間地を設けるが、B~C 区同様な切れ間ではなく曖昧に形成されている。D・E の平坦面は標高 39.5m を測り、C 区と同様な高さに作られている。

E→D→C→B 区は、木原氏の縄張り図では三の丸から武者隠れへ延びた部分にあたると思われる。

F 区は B~E 区の 2 m ほど下に位置し、やや広めの平坦地となる。A 区同様に標高 37m の高さで作られる。そして幅 1 m 程の空間地を設けて F' 区に向かい同レベルの平坦面を形成している。

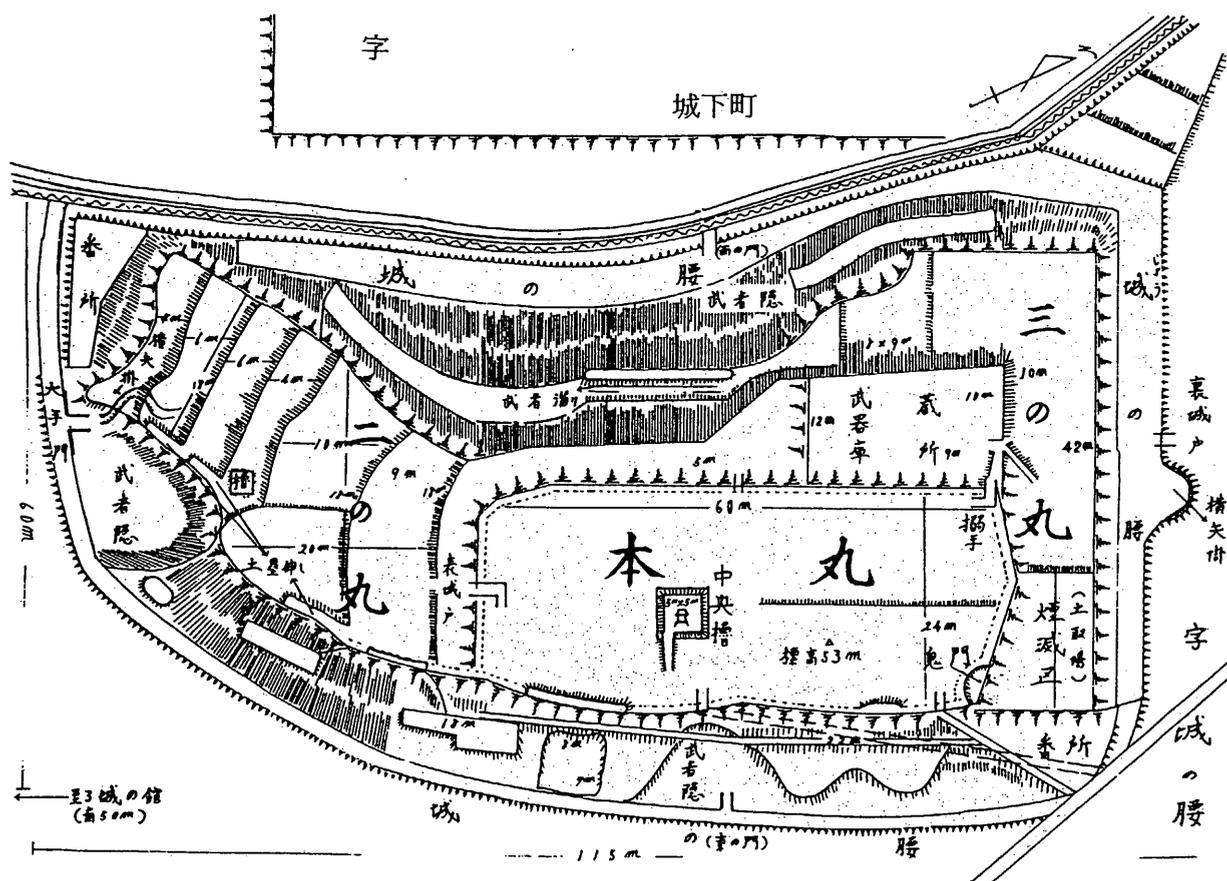


Fig. 4 縄張り図 (木原武雄氏作成図転載)

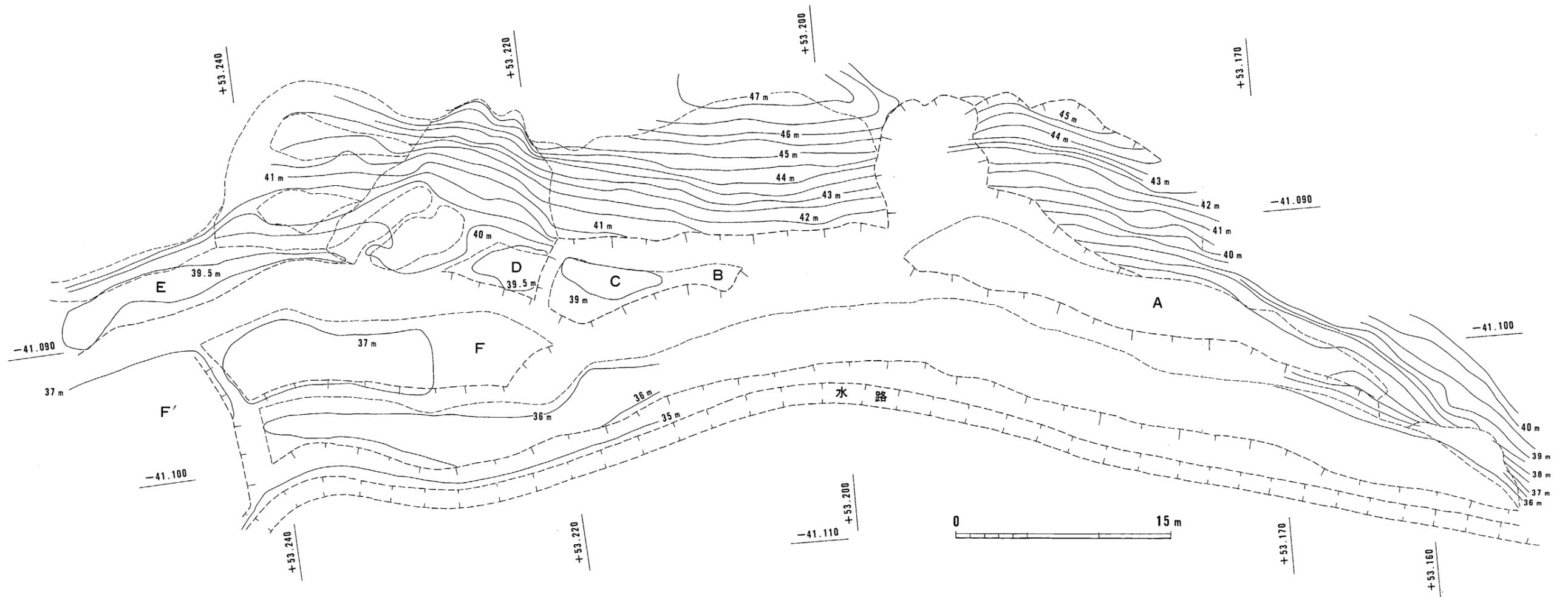


Fig. 5 現況測量図 (S1/300)



全景



こしくるわ
腰曲輪近景

PL. 2



こしくるわ
腰曲輪近景



こしくるわ
腰曲輪近景

みね はた
峯畑遺跡第7次調査

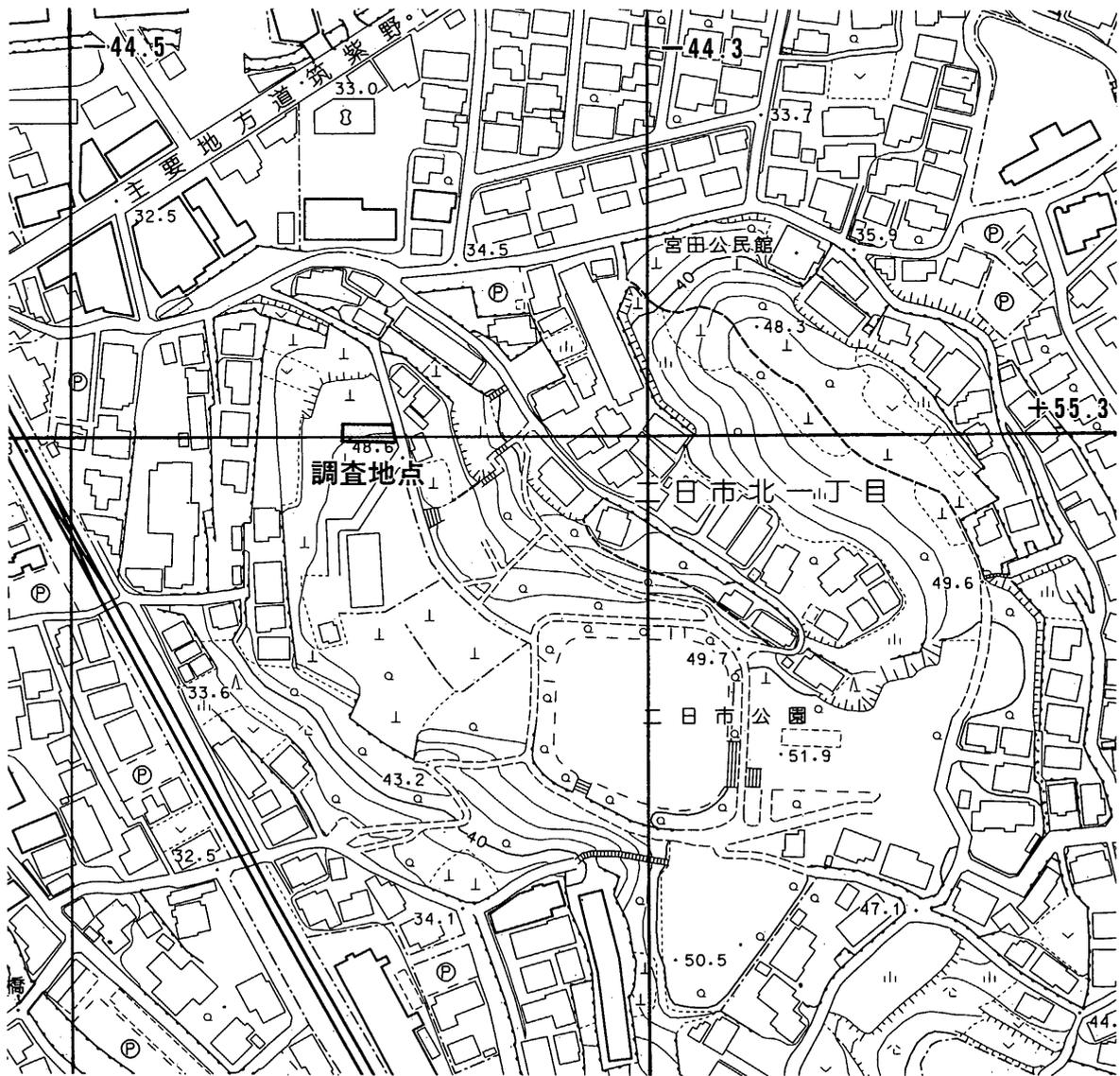


Fig. 6 峯畑遺跡位置図 (S1/2,500)

I. 調査に至る経過

平成12年7月27日、土地所有者の戸田博氏より筑紫野市二日市北1丁目506番1外の文化財の所在についての照会がなされた。対象地は周知の遺跡に含まれることと周辺では発掘調査が、実施されていることを伝え、同年8月9日に確認調査を実施した。調査の結果、対象地の506番1・506番6・506番5は墓地や畑として利用されていたため削平が著しく遺構は、確認されなかった。ただ旧地形が遺存している506番2には土坑が1基だけ検出されたため、当日記録保存を行なった。その後申請者に結果を説明し、文化財保護法第57条の2第1項の届出の提出の旨を伝えた。

II. 位置と環境

筑紫野市の東北部にある三郡山塊から派生した山陵が大きく開析され、多くの丘陵を形成する。それらの丘陵上には、多くの遺跡が点在している。

峯畑遺跡は、その中のひとつの丘陵上に位置し、筑紫野市域の中心部にあって二日市低地帯を西に望む丘陵上に位置する。遺跡の西側には御笠川水系の高尾川が流れ、谷を挟んだ南側には二日市中学校校庭遺跡や通り浦遺跡が所在している。

峯畑遺跡をのせる丘陵上には、現在では近隣公園や墓地が営まれているが、古くから遺跡のある所として知られていた。

この近隣公園建設に伴う1～4次の発掘調査によって、15,000年以上前の石器なども見つかり、旧石器時代から人々が生活していたことが理解されている。また弥生時代中期前半には、ここを中心拠点とした一つのクニがあったことを窺うことができている。大宰府政庁の置かれた奈良・平安時代までの役人の墓地が営まれていたことも推測されている。

また寺の供養塔建設に伴う第5次調査では鍛冶に関連した遺構なども発見され、重要な位置に有ったことを窺うこともできる。平成13年度には住宅建設に伴う発掘調査も実施されている。

III. 調査の概要

峯畑遺跡第7次調査は、筑紫野市二日市北1丁目506番1外に所在する。

対象地は峯畑遺跡の丘陵頂部北端にあたる。周辺には多くの墓地が営まれていることから、かなり旧地形の改変は進んでいるものと思われた。しかし近隣公園建設に伴う調査時の所見から部分的にも遺跡の遺存している可能性が考えられたため確認調査を実施した。

1トレンチをいれた箇所の所見では、表土直下にローム層の地山があつて墓地の造成の際に丘陵部が削られ、その後畑として利用されていることが分かった。

ただ南側の墓地と今回対象地の土地の一部の隣地との境界部分には旧地形が遺存していたため全面剥土し、遺構の所在を確認したが、ここも削平をうけていることが分かった。

遺構は殆ど検出されなかったが、2トレンチの西側の一部に土器が埋置された土坑状（SK-1）のプランがあつたため調査し記録した。

検出した甕の口縁付近が合わせた状態であつたことから第1～4次調査で検出された甕棺墓を予測したが、検出するとかかなり小さく甕棺墓ではないと思われた。

SK-1の掘り方の形状は直径70cm前後の不整な円形プランを呈す。土坑の底面は平坦ではなく、

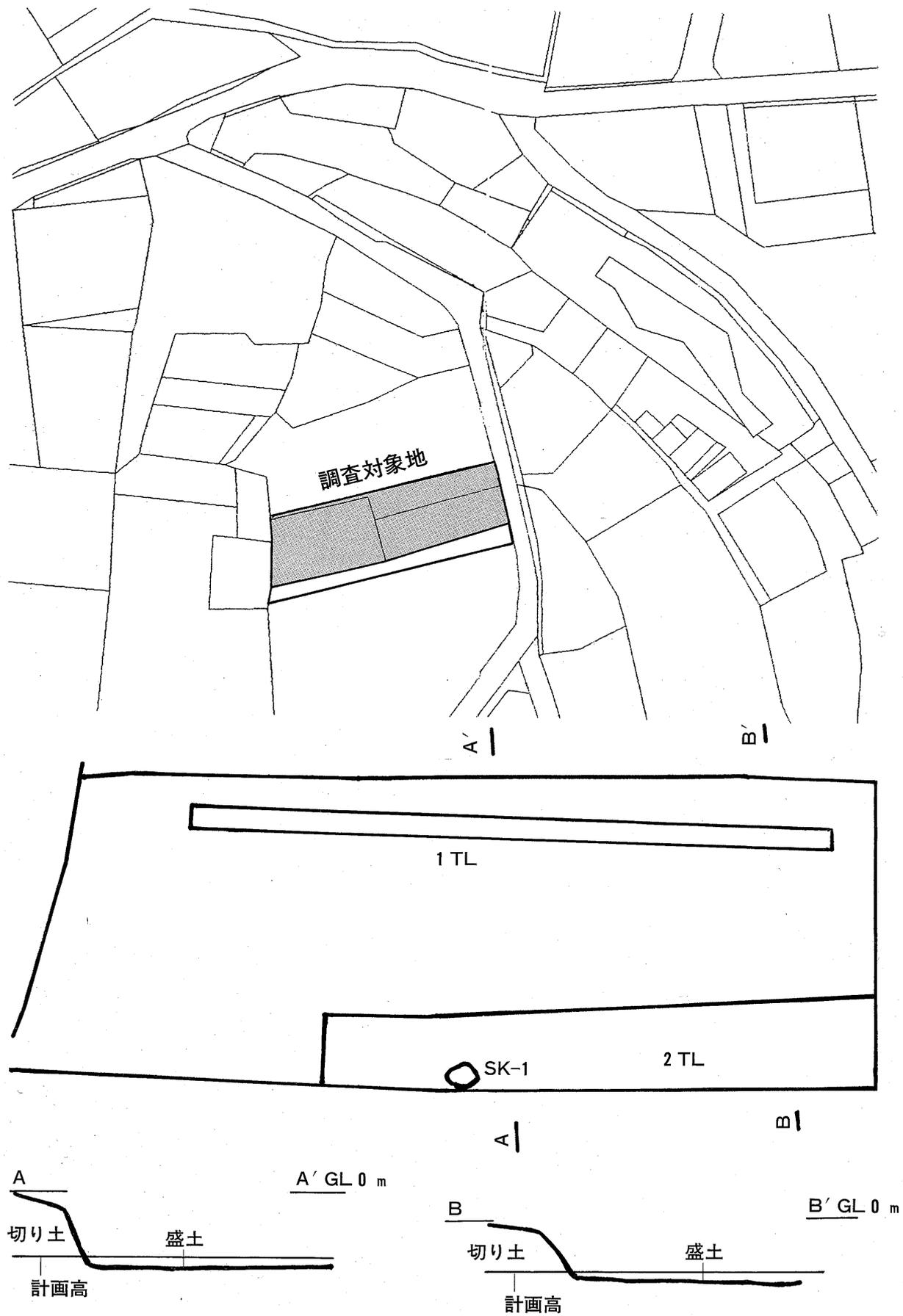


Fig. 7 調査対象地および試掘位置図 (S1/200)

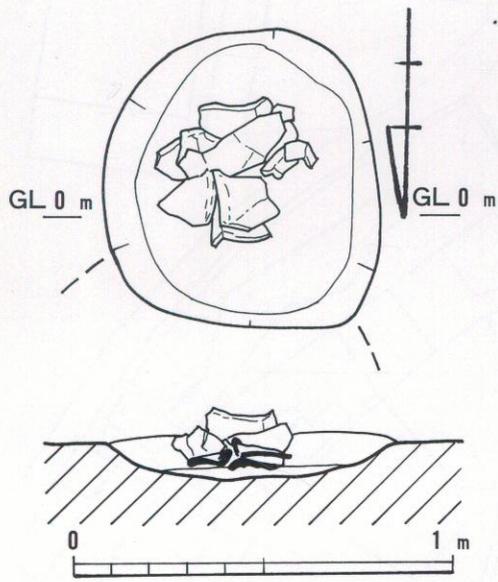
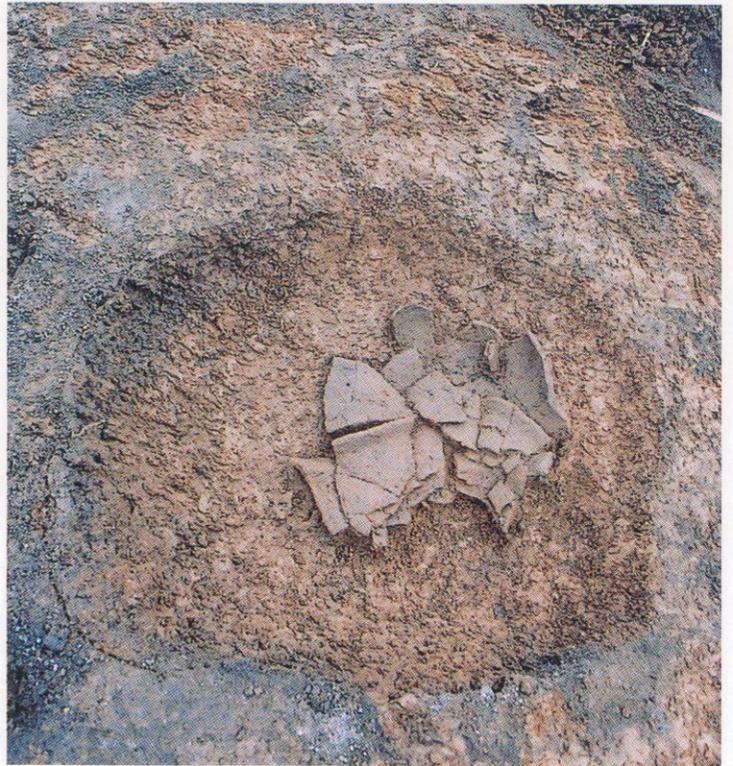


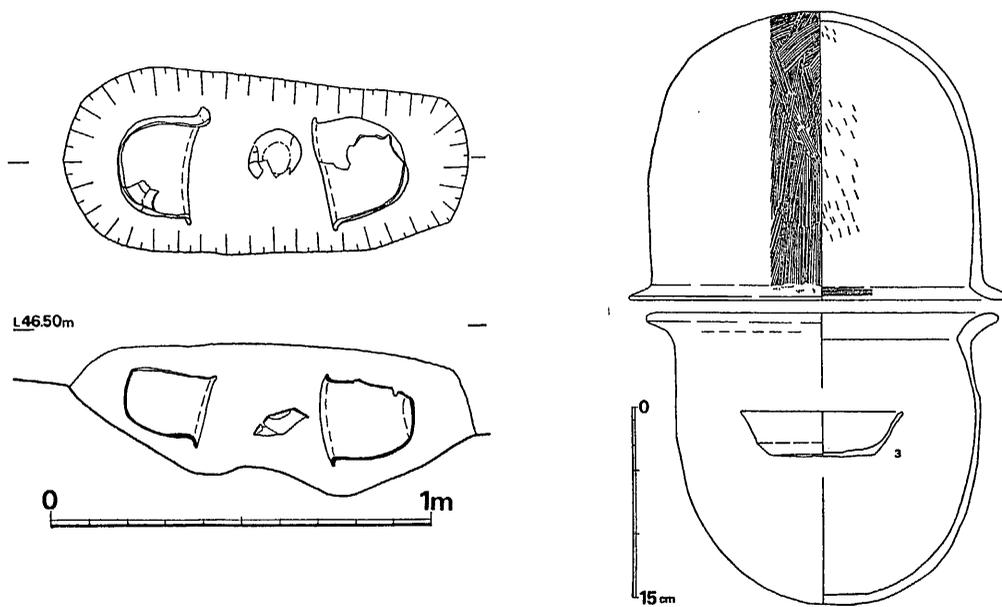
Fig. 8 出土状況実測図 (S1/20)



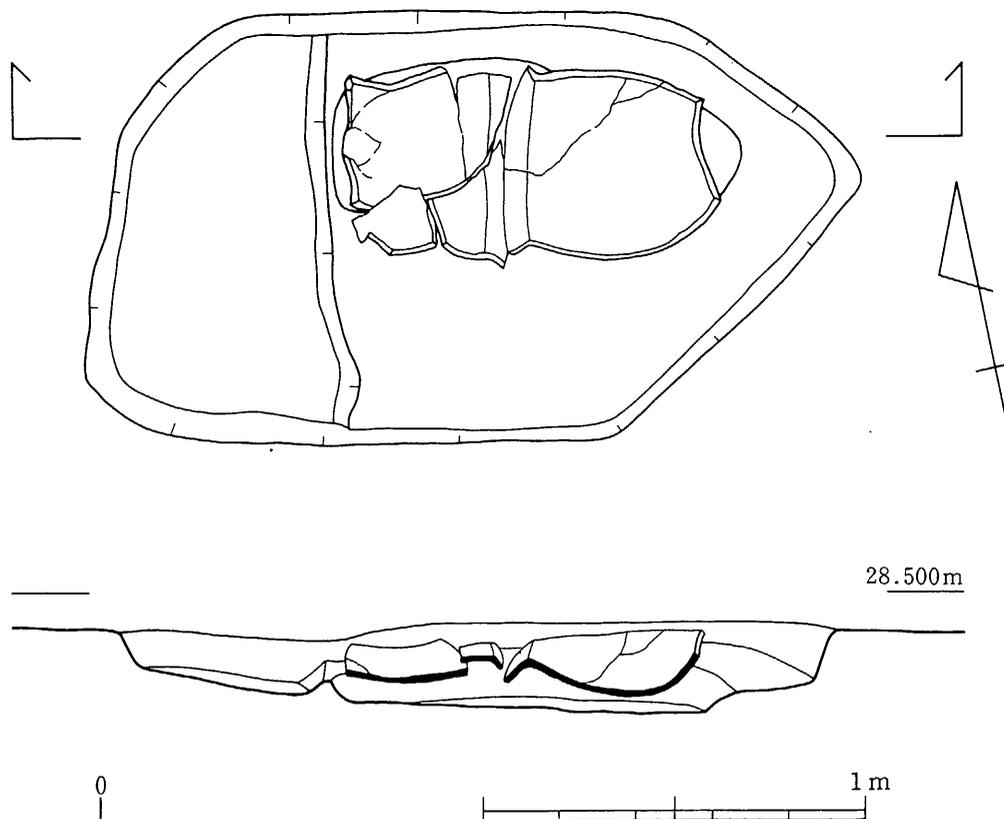
PL. 3 出土状況



PL. 4 現況写真



桶田山遺跡第3号土壙（九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告-VI）より転載



下ノ原遺跡（筑紫野市文化財調査報告書第53集）より転載

Fig. 9 市内出土の類例実測図および遺物実測図（S1/10・1/20・1/6）

中心部がやや深い鉢状をなす。壁の立ち上がりは斜めになっている。上面が削平されているため元来の深さは不明である。甕は2個体出土した。口縁部ふきんは合わせ状態で甕棺墓を連想させる。両甕ともほぼ水平を保つが整然とした検出状況ではない。同様な遺構が調査されたのは、市域では桶田山遺跡（第3号土壌墓）と下ノ原遺跡（SK1）の2例だけである。周辺域では福岡市に調査例があるだけで類例は少ない。

共通するのは、

- ①甕棺墓のように口縁部分を向かい合わせていること。
- ②ただ使用された土器が日用品からの転用であり、甕の口径からすると墓と断定するには、根拠に欠ける。
- ③土器の時期から8世紀代に位置づけられる。

IV. 出土遺物 (Fig. 10, PL. 5)

1は復元口径17.8cm、現存高14.4cmを測る。胎土には1mm程の砂粒を含むが焼成は良好である。土圧のためか、かなり歪んでいて最大径は口縁端部にある。内面の調整は、胴部中位以下は平滑になっていてケズリ痕は明瞭でない。外面のハケ目は縦方向で仕上げている。2は復元口径17.8cm、現存高12.9cmを測り、内面は口縁部から胴部下位まで斜めへら削りで仕上げ、外面は縦方向のハケ目で仕上げている。胎土には、僅かな石英粒を含み、焼成は1より、やや軟質となる。1・2ともに底部は、失われている。



PL. 5 出土遺物

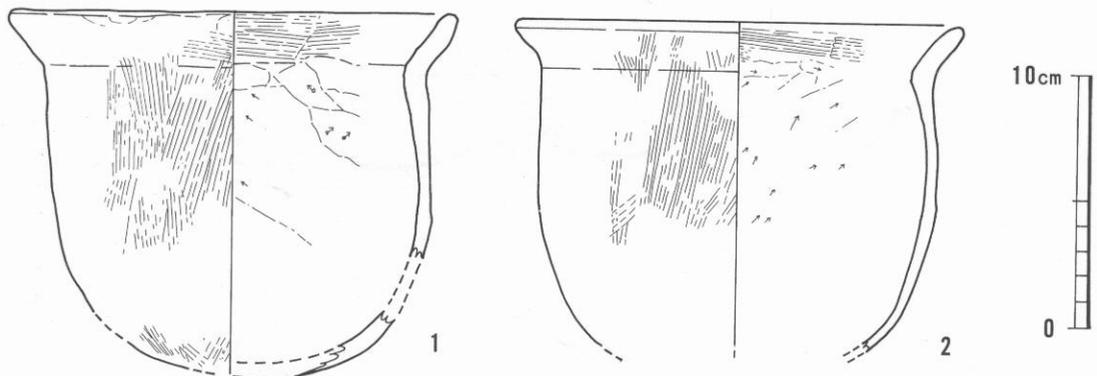


Fig. 10 出土土器実測図 (S1/3)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しばたじょう・みねはたいせきだいななじちょうさ							
書名	柴田城・峯畑遺跡第7次調査							
副書名								
巻次	第71集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	渡邊和子							
編集機関	筑紫野市教育委員会							
所在地	〒818-8686 筑紫野市大字二日市西1-1-1 TEL 092-923-1111(代)							
発行年月日	西暦2002年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しばたじょう 柴田城 みねはた 峯畑	ちくしのし 筑紫野市 おおあぎあまやま 大字天山 ふつかいちきた 二日市北	176	072 320					駐車場 建設 農園建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
柴田城 峯畑	城跡 墓地	戦国 奈良	土坑	土師器				

しばたじょう
柴田城

みねはた
峯畑遺跡第7次調査

筑紫野市文化財調査報告書第71集

平成14年3月25日

発行 筑紫野市教育委員会
〒818-8686 福岡県筑紫野市大字二日市西1-1-1
TEL 092-923-1111(代)
FAX 092-923-9644

印刷 大同印刷株式会社
〒840-0815 佐賀市天神一丁目1番32号
TEL 0952-24-8450(代)
FAX 0952-28-5583
URL <http://www.daidou-jp.com>.